

tab

No.
13

2008 / 11 / 15

後藤美和子 / 石川和広 / 野村龍
秋川久紫 / 長尾高弘 / 近藤弘文
高塚謙太郎 / 倉田良成

楯 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

後藤美和子：神隠し／01

長尾高弘：底抜け／02

高塚謙太郎：マーサ／03

野村龍：逃げ水／04

秋川久紫：追憶V（閃光と攪拌）、追憶VI（憑依と失踪）／06

近藤弘文：が折れた腕や2／08

倉田良成：あらざらむ——私の小倉百首から／09

文

石川和広：たまらなくかわゆい——村岡空の詩を読む／11

倉田良成：詩人であることについて——吉田群青詩集『海月の骨』論・改稿版／14

あとがき集／17

画：和田彰

tab 第13号／2008年11月15日（毎奇数月発行）

編集発行人／倉田良成

〒230-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ201

Eメール／kaitei511@k3.dion.ne.jp



Gioco delle Coppie

Apr 2008

後藤美和子

神隠し

どの太鼓を

山の端で聞いたのか

耳の形に流れる川を

小舟のへさきに眠りながら

葉陰にいるのか

松かさの下にか

絡まる足を蹴り上げるように

櫂は廻って下りていく

集落が探すのは

集落の子供だけ

決して渡らない橋のたもとで

私たちは渦巻いている

人間たちの爪のあと

嬉々とした笛のおと

私の大事な熊の子は

決して腹から出てこない

(皆既蝕四十四)

長尾高弘

底抜け

底が抜けたのに、

なかなか落ちないってことも、

あるんだってね。

普通なら、

すたん、

とって終わりなんだけど、

なかなか落ちないから、

なかなか終わらないんだってさ。

本人は、

気付きもしないそうだけど、

まわりからは、

見ればわかることなので、

とても辛いものらしい。

もつとも、

本人に底が抜けたと言っても、

きよとんとしているだけで、

結局わからないらしいけどね。

気付かないしわからないんだから、

本人は幸せなものなのかな。

選べるとしたら、

どっちがいいと思う？

どっちでも同じかな？

マーサ

衣装の算段の底に浸すよう沈めていたその愛情はあの人には後ろめたい衣更えの停留のような談話の最多登場人物の指名に切断の祈念を投じる一種の作法と機能しはじめていたのだとしたらマーサはもう再びはこの部屋を訪れることあるまいと目を落とした床材の撓みから仄見える節足の繚乱の巢のめぐりから遠い日差しを裳脱けて呼び戻し確かあれから七つの紅葉を過ぎたのだと喉を鳴らしては。ただただ身代を探りたいと闇雲に街路を上から下へと振れつつ視線の蟠りの一部の湿りを眺めていたのどかな日延べから影を輪郭してそうマーサを誘いその白い耳朶に細い毛を指定して戯れて。ヒューズが飛んでマーサが初めに取った手がわたしのそれではなくそれはそのとき最後に玄関の敷居に蹴躓き衝いた下駄箱の扉の把手に触れたその手であってわたしはヒューズが飛んだことであろうやく夕暮れ近しと気取りから冷えはじめた意識の優勢に残りはひたすら茫漠と委ねるしか。なるほど七つの紅葉のそこにマーサのその後れ毛をそのわたしの指先の一点のみで支えていた経過もありそれが一層の落日を裁可してゆくだけで切断の指名と呟いたヒューズの飛んで生まれた闇の幽かな影の最中に強引に引いた手もあつたのではないかと捲れ込むその黙がわたしをわたしらしめ弄び。最中の通せん坊は叫ぶの最中の巢作りはたけなわにめかしこんだマーサよいずれは来いよ切断切断と部屋の矩形に沿うように仄かだった振れ拗れ括れに情を発す衣裳の算段から夏物に売り込むものはとにかく過ぎ留まり名指し衝くも。暮れに留め留まると見せ息を託すあのころは今という動機にのたくりその手を取ったのはわたしではなく幽かな最中の引いたわたしの手もあつたのにと過ぎたとおりにはらはらと陰毛の一乱れ落ち廃れ。てマーサの岸に「動いたら死ぬよ」

野村龍

逃げ水

透きとおった

青紫の鎧のなかで

火の精が

やわらかな翅をやすめている

(その溜息は やはり炎)

香油のような にわか雨の気配に

森は悦びを隠せない

(鹿のような かもしかのような あの方！)

呪文の墓場に 集う鳥達に護られて

短い髪の少女は 裸のまま

一日にひとつ 色とりどりの魂を 喰らっていく

脆い砂丘の只中で

草蜉蝣のお葬式

今際の際

澄んだ やさしい複眼に

注がれるのは 子守唄

遠ざかる 天使と さよならの歌

Debussyの墓に 静かに供えられた

三輪の水仙

秋川久紫

追憶V（閃光と攪拌）

朝の都美術館の搬入口。開館と同時に肅々と館内に重い機材を運び入れていく十数人のカメラマンと編集者たち。開場までの限られた時間の中で、改組第十五回日展の作品撮影は効率を最優先にして進められていく。暗幕を埴谷雄高に、三脚を武田泰淳に、ストロボを高橋和巳に見立てながら第十二室へと急ぐ青年。まず最初に行われるのは被写体である出品画に対して撮影機器を水平垂直にポジショニングすることだ。凡作か傑作かにかかわらず全ての展示作品を均一に照らし出す露出計の閃光。無表情なポラロドカメラによる乾坤一擲のテスト撮影。暗褐色のリノリウムの舞台で四×五インチの大判ポジフィルムを無駄にしないためのあらゆる準備が周到かつ着実に行なわれていく。青年はそこで初めて岩絵具が創出した記録不能の神秘の色面の存在に触れる。部分は全体を構成せず、全体は部分に依存しない。あるいは部分が見えざる手によって攪拌され、化学変化の末に円みを帯びた全体となる。撮影を終え地下の展示室から出るとすぐに視界に入ってくる上野公園内の木陰で抱擁する男女の姿。ヴィーナスは決して誕生せず、悲母観音は黙したまま何も語らない。語らない神々が悪夢にうなされて自己破産してしまわないうちにと、青年は胡粉を手早く膠で溶き、観て来たばかりの全ての出品画を巨大な筆で白く塗り潰してしまうことを画策する。まるで煩惱の過積載車両を厳しく取り締まる孤独な鬼の検問係のように。

※埴谷雄高…妄言のダメージが大きかった晩年の吉本隆明とのコム・デ・ギャルソン論争。

※武田泰淳…強く惹かれた新潮社刊『快樂（けらく）』の第一巻は赤、第二巻は青の装丁。

※高橋和巳…万引きこそしなかったが、ただ訳も分からず古書で読んだ『孤立無援の思想』。

追憶VI（憑依と失踪）

白山通りの裏手にある底冷えのする薄暗い倉庫内の作業所。刷り上ったばかりの光沢紙のページを誇らしげに繰る間もなく、琥珀の神々の元へと届ける美術専門誌の梱包の仕事に取りかかる青年。ミュージシャン崩れ、元競馬新聞記者、左翼崩れ、コピーライター志願者などが黙々と段ボールを折り、世界の入口に転じるはずのクラフト色の断層を一つ一つ丁寧に止めていく。勤務時間中に内職をする編集者やカメラマンの姿を唾棄したい面持ちで想起しながら、青年は倉庫の暗がりの中で水上を歩き、ギリヤークニケ崎のように黙したまま地に円を描き、勅使川原三郎の姿で真紅の壇上を憑かれたかの如く踊ってみる。無断掲載の抗議に訪れた女が真摯のティーカップを不意に投げつけて帰った後、入れ替わりに現れた週刊誌のライターから愛人絡みの汚職事件で逮捕されたばかりの批評家の身辺について尋ねられる。数日前に失踪した編集部員は早朝に全ての私物を持ち出して跡形もなく消え、三人の女性から別々にかかって来た照会電話からその金銭絡みの詐欺行為の全貌が明らかとなる。やがて梱包作業は終息を向え、原罪みたいに堆く積まれた書籍小包は白いワゴン車の中へと厳かに移され、神田郵便局の料金別納窓口を経て裁きを司る琥珀の神々の元へ淡々と運ばれてゆく。

※ギリヤークニケ崎：鎌倉の路上で唐突に始まった大道芸の上演に居合わせ、動けなくなった。

※勅使川原三郎：直線と曲線、柔と剛が連続する至高の舞踏。山口小夜子との妖美なコラボも。

近藤弘文

が折れた腕や2

と書いたおまえは

に蹟く光としての

が折れた腕や

は石鹼のようにすり減って

いくだけだろ

この世のすべては割れた胡桃の影である

きやつきやつ

と死んだ声をつれて

うずくまった雨として

さみしさはこだまする

と書いたおまえは

灰のいいえの家なのかな

を流産する機械の

に耳をあてて秋は

を流産する機械の

に耳をあてて秋は

が尽きて

倉田良成

——私の小倉百首から

あららむ

心ちれいならず侍^{はべ}ける比^{くら}、人のもとなつかはしける

あらざらむ此のよの外の思出^{おもひで}に今ひとたびのあふ事もがな

和泉式部

彼女の場合、奔放というよりはめちやくちやと言ったほうがよかった。なによりも酒ぐせがわるかった。仕事仲間には女もいたが、その誰とも犬猿の仲で、男と大勢で飲むことが多かった。彼女のことをめちやくちやと言ったが、深夜などに長時間のあいだ、根をつめておこなわれる稼ぎが心身をすり減らすことは、なまなかの勤め人の比ではなかったので、エネルギー保存の法則にしたがって、発散される酒席の一種のもの凄さは男女ともに半端どころの話ではなかった。男女ともに煙突のようにたばこを吸った。仕事のさいちゆうに飲むことは決してなかったが、しょっちゆう二日酔いで出勤してくるやつは当たり前だった。彼女など、出勤してから初めてストッキングの片方が脱げていたのに気づくことがあったほどだという。いつもジーパン姿の彼女であったのが、どういう具合だったのか。みんなで行くどの店のランチにもけちをつけた。クライアントの担当社員に何かを言うときには、いつも紙でこしらえたお面のような切り口上だった。彼女は結婚したこともあったが、相手とは死別して子もなく、自分一人養う分を稼ぐだけでよかった。仕事で彼女と組むこともしばしばだった。あるとき現場で使う用語用字集を、持っていない彼女に貸したことがあって、貸したまま忘れていた。

同じ職場で仕事のはねたあと、みんなが集まる溜まり場へ彼女が行こうというので行つた。例によつてグラスと罵声と嬌声が飛び交う坩堝と化したのだが、そのとき突然彼女が脱ぎだした。たちまち裸になつた上半身をあつけにとられて見たのだけれど、痩せてうすい胸といたましい傷のようなあばら骨の影がそこにあつた。誰かがインスタントカメラでそれを撮つたことから、急に潮の引くように座が冷めていった。気がつくともう服を着た彼女がそっぽを向き、男のような苦い顔をしてグラスを舐めている。このときは盛大な尾ひれがついて武勲話のように鳴り響いた。意外にも女たちは彼女を責めるより、そこにいた男たちを軽蔑のまなざしで見つめた。私も例外ではない。それから何年もたち、私も職場を変え、結婚もしてから風の噂に彼女のことを聞いた。郷里に帰つたのだという。それは却つて幸福なことではなかつたか、と思つていたら話にはその次があつて、医者からの、病気の養生は国元でしたら、との忠告に従つたのだという。またさくらが咲いたのだからそろそろ一年になると。あの溜まり場のことがあつてから、数か月後に彼女が返してくれた用語集を取り出してみる。一葉の写真が挟まつていて、上半身あかはだかの彼女がこちらを見ている。草紙の絵の奪衣婆だつえはに衣をはぎとられた童女のような。細い川を、ここから先はひとりで渡る子どもみたいなに、安心して。写真の中で鳥になつて彼女はうたうのだ。ねえ、なつかしいわ。ちゃんとわたしのほうを見て。わたしはここにいたのよ。もっとわたしのことを見て。わたしのことをわすれないで。おねがい、わたしをわすれないで。

石川和広

たまらなくかわゆい — 村岡空の詩を読む

以前ちよつと前の『詩学』を取り出して読んでいたら、村岡空の追悼特集が載っていた。追悼特集といっても、村岡空の詩が10篇載せられているだけである。しかし、詩作品だけの追悼号というのは意外と清々しく、そして作品もよかつたのだ。

ネットで、ある人が数十年前の詩学の合評会には編集の嵯峨信之・石原吉郎・村岡空がいたときもあつたと聞き気になつていた。

今このときに読んでみても、イマイチピンと来ない。あれ？前はもつと感動したのに。しかし詩というのは毎日毎日読んで感動するわけでもないかもしれない。書物や、作品だけでなく、プロスポーツも人のちよつとした仕草もなぜか知らないけど、ぐつと来てしまふときがあるから楽しい。それはなぜか。考えてみる。

ただひとつ

酒を飲ませると

幻人は笑つた

その笑顔に魅せられて

老若男女が ぞろぞろ

オミキを供えにやってくる

なかんずく人妻たちは

口紅を濃くして

赤えいのごとくに泳いでいる

だが 幻人は

にこりともしなくなつた

すると それがまた

たまらなくかわゆい といひだした

村岡空「幻人」から引用した。幻人というのは、野鳥の話とかそういうものがわかるらしい。わけもなくえんえんと泣いたりする。周りの人々にもよくわからない存在なのだが

酒を飲ませると「笑う」わけである。しかし周りの人が喜ばせようとして張り切るとまた笑わなくなる。しかしそれが「かわゆい」とみんな感じてしまうのである。

何を考えているか理解できないことがある。そういう人やモノがある。私はこの「かわゆい」が好きである。自分が犬とかそういうかわいものが好きなこともある。でも、幻人はかわいい人ではなさそうである。想像ではひげもじゃかもしれないし。けれど、「老若男女」の関心を引いてしまう。例えば多摩川にアザラシが来たといえは大騒ぎになり河原に露店が出たりマスコミが騒いだり：この文章の後を引用する。

ある朝 幻人が消えた
消えるべくして消えた

と世の有識者はいふのだが

いやいや 消えたのではない

あなたがたひとりひとりのこころのなかに

永遠に住みついたのだ

と山寺の幻住はいふ

例えばわかりやすく多摩川のアザラシ「タマちゃん」が消えると、「北の海に帰つた」とか「死んだ」とコメントーターが言うような具合。私はタマちゃん騒動も、それに続くアザラシが各地の市街地の河川に迷い込んだニュースも喜ばなかつた。親父が四国的那賀川に現れた「ナカちゃん」の住民票なるものにこやかに出した時も「えー」と呆れていたのだ。なんかわからないけれどアホらしかつたのだ。個人的に。

その考えは変わっていないが、なぜか気まぐれにカワイイ・あわれだなあと胸をキュンとさせられることは私にもたくさんある。そういう感覚はいつの間にか生れてしまつていたのである。近所に目も耳も聞こえない犬が

いる。よくいく文房具屋で飼われている茶色と黒の混じった雑種である。私は通るたびに目を細めていた。店の隣の駐車場のシャッターのところで寝ているのである。こないだその犬の名前が気になっていたら朝散歩に行くところに行くわしたのである。それでおばさんに名前を聞いたら「クウ」というのである。クウは眠いのかしきりにあくびする。おばさんが「行こう」と促すと立つ。けれど、眠いのか年とつて身体が動かないのか、すぐ前足二本だけ折り曲げて前のめりに坐ってしまう。また立ち上がる。おばさんは「としやから朝はいっしょけんめいネジ巻かんと動かんのです」という。そんな動作をなんども繰り返す。「かわゆい」のだ。しばらくしたら意外にすたすた歩いていった。

「かわゆい」というと何でも免罪される風潮もあるので自分でも嫌なのだ。しかしそういうのがないと日常はキラキラしないような気もするのである。ただそれが大きくなれば何となく変な感じがする。アザラシ騒動のように。

村岡空はそういう人々の浮ついた、しかしそれなりに真であるような心を否定しないのである。「山寺の幻住」は村岡の中のそういう人格のひとつだろうと思う。村岡空自身も自分と世の有識者を並列させているように思う。自分も訳知り顔には変わりないなあと。とらえどころがないんだけど、ついついデレデレしてしまうような浮き足立つような暖かになるような心映え。それは移り行くので、相手だってそういう好意に義理立てはしないのである。幻人はそのようにして消える。この詩は移ろいそのものであるようだ。

対象を次々変えうるような移ろう心。私にもそれはたくさんある。自分のとりとめのなさが悲しく情けなく思われるときもいっぱいあるのである。自分の欲望とか心は流体で、どんなものにも注がれるような節操の無さがあるのだ。しかし、そういう移り変わりがないと、自在さもないとは思うが。次に「霧」という詩。全文引用する。

もののかたちが その中心を失うと
たちまち風がおきる

大気の流れ

それが一陣の風であるなら

峯から峯へ

谷から谷へと

いま失ったものばかりを探し求めて

まだ幼いこだまは ひたはしる

風のかたちには重みがあつて

しだいにそれは液化する

樹木のざわめきや

草花のそよぎによつて

かすかないのちを含んだ

つぶらなはずくは

この詩が10篇の中でいちばん好きなのである。書き出しがすごい。死だけでないのだからけれど、それが起こると風が悲しみのように、あるいは風も悲しみも一体のように伝わってくるのだ。子供が泣く声だろうか。鳥なのかな。しかし泣くということも移ろう魂の不確かさに思えるときもある。「お涙頂戴」といわれることもある。

涙とは本当らしさのひとつのかたちである。泣くことがいつも美しいとは思わないわけだがしかし依然として、そこに何がしかゆるがせにできないものがあることも本当に思える。

ここで先ほどの詩にある「幻」や私が言う「移ろい」と対照的な「重み」という言葉があらわれることに注意したい。何かが失われそれを追いかけるように走るのだ。そこに「かすかないのち」を含んだ「しずく」があらわれる。失われたものを追う動きは、何かが失われたことと同時に現れる。誰かが死んだから泣くというのではなく、誰かが「その中心」を失うことが風を起す。悲しむことも風的作用なのだ。村岡空の詩の中では、誰かの心が別の誰かに移ったり感染したり何かにつ

かかるのではないようだ。そのような自他の分別があつて乗り移る心があるのではない。すべてが一体的な流れの中にあるのだが、そこから不意に涙や命になつて地上に落ちるのだ。

すべてが無垢であり移ろいであり、天使であり幻人であつたら、やはり少し寂しい。

どこか重さをもつてしまひ氣づいたら生れ落ちてゐる。それはまたどこかへ移ろうのだらう。そのことが寂しくまた不思議に「かわゆい」ので、生きてゐる。実はそのような不確かな心が生きることの重しなのだらうかとも思つてゐる。

※ 村岡空の詩はすべて、詩学2005年10月号「特集」村岡空作品集より

詩人であることについて

——吉田群青詩集『海月の骨』論・改稿版

吉田群青さんの詩集『海月の骨』を読んで思ったことは、詩人という役回り、あるいは詩人であることが避けがたい巡り合わせというものがあるのだな、ということだ。と言って群青さんの身の上の具体的な何かを、直接存じ上げている、というわけではない。彼女に関する情報は、みんな彼女自身によるところの、詩やブログのうえでのものでしかない。

そもそも、当詩集を恵与され、拝読することになったきっかけ、さいしょが、詩のウェブマガジンと言うのが正確どうか分からないが、「未詳」という媒体に乗った彼女の作品で、それが他の作者のものとはひどく異質に思え、検索をかけて（ストーリーカーみたいに）、「ホテル・バルセロナ」という名の、吉田群青としてのブログや、「弁解なんかしたくなかった」という詩専門のホームページに辿り着いたのだ。ここから本腰を入れて群青さんの作品を読んでいったのだが、そこではじめに言った感想をあらがいがたく持たされた。

どこが他のあまたある凡庸なネット詩人と違うのか。かかるネット詩人たちをふくむ、現代の多くのわかものがそのことに苦しんでいる、現実感や存在する実感の無さ、「不正」に対する無力、自己責任という名の軛、展望というものや達成感、具体性の欠如に、彼女もまた同じく悩まされている。そして、同じく絶望している。だが彼女の場合、無力・無感覚の苦しみも、絶望感——そこから来る寂寥感という負の感情も、余人のそれよりさらに遠く深い場所から到来して、また遠い場所へと反響してゆく感覚といえるのではないか、という気が、私にはしきりにするのだ。

遠く深い場所から群青さんは、驚くほど正確かつ無造作に、その感覚を物象としてつかみ出し、言葉に貼り付ける。おそらく冷静とか厳密ということから最も遠いところで。ただし一種の静かなトランス状態のなか、はた

から見たら冷静とか厳密というものどちよつと見紛うばかりに。たとえばこんな具合に。

ししやもは

帰らない人を待っているから

あんなにも口をあいているのです

月夜の晩の食卓に

置き去りにされた

ゆうべのししやも

たまごを抱いたまま

ナイフのように

じよじよに固く

尖っていきます

（「ししやも」全行）

知人はじよじよに

遠のいてゆくところだった

その背中は丸で

何かの表徴みたいに揺れてたけど

でもそれはいったい何だったかな

うまく考えられなくて

銀杏が確か

雨みたいにちつてて （「すきとおる」最終連）

一人の人間が詩を、書き進めるうちに初めてだんだんにせり上がってゆく達成点というものがあるとするなら、彼女はいきなり「その地点から」書くことを始めてしまう。そしてそんなステージの自ずからなる違いは、彼女の（病歴や性格、かつてのパートナーに暴行された経験とかの）悲劇性というdestinyに精確に対応しているのだが、しかし詩は、彼女のそういった個人的でプライベートな事情を恐らく超過してしまう。ここが詩人であることの否応のない巡り合わせであり、余人と異なる点なのだ。

群青さんの詩の具体的なところに、ここで少し触れてみる。その多くがトボケて飄逸な味わいを有し、いふなれば戦前文化的な風合

いをまとった彼女の詩を読んでいると、ふつうの抒情詩とは少しかけ離れた感じを持たされる（彼女は好んで漱石、芥川、百閒、露伴ほかの近代文芸を耽読する）。通常の抒情詩が絵画や静止画のようなものとすれば、対して彼女の詩には時間的な進行と展開（転換）があるのだ。つまりドラマ的であり小説的なのである。ついでに言えば、作品に、落語のいわゆるオチのようなさいごの二、三行ないし一行がしばしばつく。

この点についてもつとえば、「雨の日に変質する」のさいご二行は、詩では心当たりがないが、小説では漱石の『吾輩は猫である』の冒頭に、「残酷な子ども」のさいごの二行は、同じく漱石の『坊っちゃん』のむすびによく似ている。ちなみに引いてみる。

吾輩は猫である。名前はまだ無い。（『吾輩は猫である』）

自分の名前は

まだ考え付いていない（『雨の日に変質する』）

死ぬ前日おれを呼んで坊っちゃん後生だから清が死んだら、坊っちゃんのお寺へ埋めて下さい。お墓のなかで坊っちゃんの来るのを楽しみに待っておりますと云った。だから清の墓は小日向の養源寺にある。（『坊っちゃん』）

家にはすでにどこからか

新しい母がちゃんと来ていて

ドーナツを揚げたり

ホットケーキを焼いたりしてて

だから別にいいのかなあと思う

新しい母には顔がなくて

だから僕は母の顔を知らない

（『残酷な子ども』）

この二例は気のせいかも知らぬが、それほど

ど群青さんの詩の世界は、近代詩や戦後詩というよりは、私などにはなつかしい、明治以来の日本の近代小説の匂いがする。じじつ、「妻の話」では、太宰治の『斜陽』を「わたし」が読んでいるところが登場しさえする。

時間的な進行について言えば、そのことを示す助動詞や副詞をふくむ行が「お話」の進行や展開（転換）を促している。たちどころに例示できるであろう（傍線で示した部分）。

誰か来たような気がして

ドアをあけたら

君の気配が立っていた（『君の気配』）

やがて夜になると電柱は

支える青を急になくして

心もとなくそこに立っている（『夜空の電柱、冬のはじまり』）

そのうち熊はわたしを横目で見ながら

りんごを買って

去っていった（『雨の日に変質する』）

詩の世界の雰囲気は近代小説的であるといふのも、いわば抒情詩のような絵画・静止画でなく、時間的な進行をともなった、こういう特有の性格から推し量ることができるのである。所謂抒情詩とは少しく異質な、ひとつひとつがある意味でコンパクトな「お話」の素から成っている。そしてそれが群青さんの手許から、行分けされて私たちに配られるといった具合である。あえて詩の在り方として分類すれば「寓話的なもの」という概念に相等であろうか。

それは、よくできた小咄のようなものから（『小さなシリーズ』など）、名手が書いたみたい短編小説（『妻の話』『王様』『資本主義と社会主義』など）、背後に「お話」の存在を思わせる一種絵画・静止画的な抒情詩（『夜空の電柱、冬のはじまり』『初夏』『お母さんと結婚したい』等、本詩集では数多く書かれたはずのこの系統の作品が比較的割愛され

ている)、それから厳肅なアポカリプスのような顕現に至る作品群、といった多様な層から成っている。そして、これは言っておかなければならないことだが、この詩集の基層にある「気分」というものが何なのかを考えてみると、いま示したさいごのカテゴリー、われわれの胸に厳肅ともいえる印象を残す次の二つの詩は避けがたく挙げられなくてはならない。これは群青さんからこの社会に突きつけられたアポカリプスである。すなわち「飼育係、或いは荒廃」と「昨日、戦争が」だ。

前者は小学校のときのこらししいが、メダカを水槽から排水溝に流した(逃がした?)作者と思しき飼育係は、そのあと、からっぽの水槽に入れられたミドリガメが、男の子たちの「遊び」によりサッカーボールの代わり蹴られて教室の隅で死に(虐殺され)、ミドリガメの後、また空の水槽に入れられたハムスターが、男の子たちの「冗談」によってたちまちのうちに踏み殺され(惨殺され)るのをただ傍観するしかない。そして「死んでいった小さい生き物」を悼むため、自罰のようにみずからの息を止めるのだ。群青さんがそのときまさにそのようであった、子供たちの世界がこんなにも救いのないものである事実、私は息をのむ。

また後者は架空の物語だが、目の前に広がる世界に、悪夢のような、非現実的なまでの残酷さを感じし、造形している作者が、まだ二十歳代の若い女性であるということに、驚くとともにひどく胸が痛むのだ。

僕が戦争に気付いたのは
それから三日後で
何故気付いたかと云うと
僕のぼろアパートに
女の子が訪ねてきたからだった
女の子は一人では無かった
子供を抱っこしていた
子供は血まみれだった
頭がかち割れて
きれいにちかち割れて

そこから宇宙のような
宇宙のような

女の子は錯乱しているようで
この子を助けてください

あたしの妹なんです
と何度も何度も叫んだ
どう見たつてもう死んでいるのに
(中略)

だって僕はまだ若いし
とたわけた事を考えた刹那

どこからか飛んできた大砲の弾が
女の子を吹き飛ばした

宇宙のような
宇宙のような
塵・芥が雨のように
(「昨日、戦争が」)

作品は、ユーモアもあり、トボケていたり、ひどく真面目であったり、現在のパートナーや肉親に対する切ないまでの愛情を抱いていたりとさまざまだが、総じていま示したこの二篇が作者の世界の最深奥にうずくまって、この詩集の「気分」を醸成している。それは恐怖に満ち、逃げ場がなくて、人間的な感情といったら諦念がなく、けれど一歩たがえればあこがれと見まがうほどに綺麗な寂寥の色を帯びている。巧拙ではなく、生身でそのただ中において、絶対に見えないものと切り結んでいる。実に詩人であるということ、詩の巧拙を超えたなものかなのだ。それはひとつの栄耀であり、痛苦でもある。この詩集のさいごの、次の詩のさいごのようだ。

無意識のうちに手をいっぱいに広げている
何を掴みたいんだろう
掴みたいものなどもう何も
無いはずだと思っていたのだけれど

(「ひとりぐら」)

confidence

初めて沖繩に行った。久高島でイザイホーの祭りの神域（立ち入り禁止）の入り口を見ようと思っていたが、気づかないまま、自転車で素通りしてしまった。少し走って、髪留めを落としたことに気づいた。どうやらイザイホーの神域を通り越したらしいことも分かった。向きを変え、元来た道を自転車を漕いで戻ると、私の髪留めが落ちていた。神域の入り口は、まさにそこにあつた。（後藤）

冬の気配を感じてから、急に気持があわたしくなった。考え考えやっていたのは間に合いそうにない。手を動かしていればなんとか終るだろう、という悠長さはどこかに引っ込んでしまつて、冬までに必ず完了するように、せつせと手を動かさねばならなくなった。夏以降、台風の心配ばかりしていたような気がするが、冬はそれどころの話ではない。なにしろ数カ月間も続く、氷と雪の世界なのだから。高校を卒業するまで足寄で育つたわたしにはまったく未知の世界ではないのだが、断片的に冬の光景を思い出すことはできて、体の感覚が北海道の季節の変化を読めなくなっている。通年の構えができていないのである。この構えができるころには、わたしもこの地の人間にすっかりなりきれているだろうが、少々迷いもある。季節に対しても何に対しても、構えのない隙だらけの人間でいたいなあ、という願望があるようなのだ。この願望と、この地の人間として生きることがどう折り合つていくのか。この先どう展開するか分からないが、59才まぢかという年齢になって、こんなに楽しい人生が待っているとは思わなかつた。

心から、そう感じている。（木村）

来年の1月末にある社会福祉士国家試験が迫ってきた。試験勉強は物憂い、じつさいキツイものです。身体を鍼灸で整えながら、たまには（いつも？）気を抜きながらやっつけていきたいです。（石川）

我が家のアイドルは、猫のぺたるです。我が家、と言つても、僕は結婚していないので、僕のアイドル、とでも言い直すべきでしょうか。今年の7月で、ぺたるは11歳になりました。もちろん、雌猫です。ちなみに、今年の6月で、僕は41歳になりました。11年間、1日も休まず、毎日ともに暮らしてきたことになりました。こうなると、もう、夫婦といつても差し支えないでしょう。一方、詩の方は、書いたり休んだり、紆余曲折はありましたが、21年間、書き続けて来ました。人間の女性が考えていることは、僕にとつて永遠の謎ですが、ぺたるの考えていることなら、手に取るようにわかります。人間でも、11年一緒に暮らせば、そうなるでしょう。四十を過ぎて、詩など書きながら、結婚もしないで猫と暮らしている人間は、これはもう、普通の人間でないことは明らかです。僕のことを何と呼ぶかは、皆さんにお任せします。敬愛する作曲家、近藤譲氏の作品に、「BONJIN」なるものがありますが、僕は、自分でも、自分のことを「変人」だと思いません。（野村）

散文を書きたいと思いつつ、なかなか書けない。やばいなと思つた頃に、何とか10数行ひねり出す。うんとよいとは自分でも思わないが、出さない方がよいというほど

ひどくはないと自分では思っている（そんなことはないよ、と思われる方も多数おられるだろうけれど）。Mayに2か月に1回というリズムを作っていたれているのは偉大なもので、これがなければ何も書かないまま、ふんだんに残っているというほどはもうないはずの時間をただやり過ぎしていただろう。加入満一年で改めて感謝する次第です。（長尾）

禁煙して三ヶ月になる。味覚という感覚の、また秋という季節の凄さをあらためて感じている。飲み食いにしても夕焼け空の色合いの変化を眺めるにしてもしあわせなのかかなしいのかわからず脊髄のあたりがびりびりしている。（近藤）

結論を急ぎすぎる詩の耐え難いぬるさみたいなものからの敵意をいなく、それが詩なのでしょう。敵意以前のぬるいものもそれなりの在り方で心地よいということには無関心なのですが。もし中日ドラゴンズがCSを勝ち抜き、ライオンズをも倒すという事態が出来していたとしたらば。このような想像は例えば中村ノリに中也賞を授与してみてもいいかと楽しくさせてくれます。しかしシーズンで12ゲームも下位だったチームの日本一の称号とは。いずれにしてもそれも今となつては妄想の域に静まったのですが。

さて、今号より名前が変わりました。（高塚）

昭和37年に世を騒がせた真贋論争Ⅱ佐野乾山事件の当事者で、森川如春庵（勘一郎）の三男・森川勇は昭和33年に森川家所蔵の宗達筆「西行物語絵巻」（旧毛利家本、旧国宝）を指定による制約を無視して分断し、譲渡するという信じ難い事件を起こしています。宗達筆「西行物語絵巻」には旧毛利家

本と旧渡辺家本があり、現在は旧毛利家本四巻のうち三巻を出光美術館が、旧渡辺家本六巻を文化庁が所蔵していますが、この時散逸した旧毛利家本は出光美術館による長期間の再収集の尽力があり、42年後の平成12年に第三巻が欠落した状態で重要文化財の再指定を受けています。現在開催中の「大琳派展」には、この旧毛利家本、旧渡辺家本だけでなく、散逸した旧毛利家本の第三巻の断簡（最近国によって買い取られたもの）も展示されており、一コレクターの愚行が引き起こしたこの作品の半世紀にわたる受難の歴史を振り返ることが出来るようになっていきます。（秋川）

彼の故郷はもう音楽の中にしか無いのだった：

N響アワーのバルトークがよかった。同郷の作曲家ペーテル・エトヴェシュの指揮は、有形無形の景色を丁寧に見せる。ちゃんと譜面をめくりながらの指揮ぶりにも非常に好感がもてた。

以前テレビで見たバルトークの古里の風景が、自宅の近所の秋景色にあまりにそっくりで、彼の無念を思つて道端で泣いたことが最近あった。

個展の搬入の前々日、NHKハイビジョンで蕪村の十宜図を観てしまい、もう絵をやめてしまいたいと思つた：

ミキティみたいに泣きはしなかつたけど。

Gioco delle coppie は、バルトーク
・ベラ作曲 管弦楽のための協奏曲 第2
楽章『対の遊び』。（和田）

私も蕪村についていささか関わりがある（ごらんのように、和田彰の「あとがき」で先を越されてしまっているが）。この十一月末までに、この絵師について書かなくてはならないのだ。いったいに、古い画に

ついて深い関心がある（これについても秋川久紫に遥かに先を越されているが）。なぜかということを私なりに考えてゆくと、これはたぶん、「現在」を相対化したい欲求に根ざしているのではないか。そうあやしむ。昔のものに惹かれるというのは、たぶん単純に昔に還りたいのではなく、「現在」が唯一無二、絶対ではない、と知ることによって、或る展望を得たいのだと思う。ほんとうのところ、未来や次代というものは、いま・ここから立ち昇るのではなく、過去のほうから繋がって到来するものではないか。

今号の散文は、桐田真輔氏主宰のウェブマガジン「リタ」、ほかに発表した稿に手を加えたものであることをお断りしておきます。（倉田）